

「心の理論」を土台にし 認知発達の過程を解明する

京都大大学院教育学研究科 教育科学専攻 子安増生研究室

発達心理学は、知覚や言語、思考、知能などが年齢と共に、どのように発達していくのかを心理学の観察・実験により明らかにしていく心理学の一分野である。発達心理学を専門とする京都大の子安増生教授は、日本で初めて「心の理論」に着目。幼児期から児童期にかけて、他者の言葉や行為の背後にある意図を理解できるようになるという子どもの発達過程を明らかにしてきた。その研究成果は、教育・精神医学・脳科学など多方面に応用されつつある。

フローチャートで分かる子安研究室

大学院生の 主な出身分野

教育学

心理学

など

◎修士課程のみの専修コースでは、教育や心理の他に、文学や経済、情報などのさまざまな分野から学生が集まる。博士課程を目指す研究者養成コースは、この分野の論文の提出が必須であるため、他分野からの進学は難しい。

研究にかかわる 学問分野と研究内容



◎認知心理学、発達心理学、社会心理学、教育心理学など、子どもの発達や教育にかかわる分野との接点が多い。心理学は文系学問でありながら、科学的・実証的な体系的要素が濃い。目的に応じて観察、実験、質問紙調査、インタビューなどの調査法を使い分ける。

研究成果と 社会のかかわり

臨床発達心理士の
育成

学校現場や
臨床現場での応用

啓蒙活動・政策提言

など

◎日本発達心理学会が中心となり臨床発達心理士を育成。実践活動を通じて学術的成果を直接臨床の現場に反映させる。講演活動や書籍の出版などによる啓蒙活動、官公庁への政策提言や資料提供などがある。

人に対する興味・関心と科学的素養が必要

心理学が求める学生像

人に対する興味を持っている人

個人や社会の幸福に貢献したい人

科学的素養を備えた人

心理学の分野に進む上で必須の素養は、人に対して関心を持っていることです。「人間は不思議だ、面白い、なぜこんなことをしているのだろう」というように、人間の心や行動への興味を常に持っていることが何よりも大切です。心理学は人の役に立つこそ意味のある学問です。自分の興味・関心の赴くままに、理論ばかり追求していても意味はありません。単に事実を知るだけでなく、困っている人を助けたい、自分自身を高めたいというように、どうしたら実践に生かせるかを常に考え続けることも重要です。

心理学は、日本では文系の学部にも属することが多い学問ですが、理系的な要素もあり、特に統計学は必須です。高度な知識は必要ありませんが、ある程度、抵抗なく数学の授業を受けられる人の方が向いています。アメリカやヨーロッパの大学には、心理学が理学部に属していたり、心理学専攻の前提として高校時代に物理や化学の履修を求めたりするところがあります。世界で活躍するためには、科学的素養も欠かせないことを忘れないでください。

高校生へのメッセージ

学問は日々の積み上げが大切です。積み上げたことが成果に表れるまでには時間がかかるかもしれませんが、先回りをせずに地道に進んでほしいと思います。大学で学ぶ内容は全て、高校の基礎が土台となりますから、その時に学ぶべきことをしっかりと学び、進むべき進路を定めてください。



心理学増生 教授 Koyasu Masuo

京都大学大学院教育学研究科教授。副研究科長、グローバルCOEプログラム拠点リーダー。京都大学大学院教育学研究科博士課程中退。愛知教育大学心理学教室助手、同助教授、京都大学教育学部助教授、同教授を経て現職。現在、日本発達心理学学会理事長を務める。主な著書に『心の理論』岩波書店、『幼児が「心」に出会うとき』(有斐閣)、『子どもが心を理解するとき』(金子書房)などがある。

研究を志したきっかけ

少人数のセミナーで心理学の面白さ、奥深さに目覚める

将来の進路として心理学を意識し始めたのは高校2年生の時です。北杜夫さんの小説に感銘を受け、精神医学に興味を持つたこと、文理にまたがる学際性に魅力を感じたことがきっかけです。

私が京大に進学した頃は大学紛争の真っ最中でした。全共闘の大学封鎖により、入学から数日で授業がなくなりました。この時、学生が授業を受けられないことを心配した先生方が、自主講座を開いてくれました。本を読んだりディスカッションをしたりするセミナー形式で、学生はさまざまな講座を受けられました。何しろ、先生は教えることに、学生は学びに飢えていました。講座は濃密な時間になり、私は学問の面白さに目覚めました。もし基礎科目を一斉授業で学んでいたら、あれほど勉強には打ち込まなかったかもしれません。専門分野の高度で刺激的な話を少人数で聞くことで、心理学への関心がより高まったのです。

現在の研究テーマ

子どもが他者の心を理解するプロセスを実証的に研究

大学院で発達心理学を修め、研究者の道を踏み出した私は、1994年、留学先のイギリスでその後の研究活動を方向付ける「心の理論」と

出会いました。他者の気持ちを理解したり心の動きを推測したりする心の機能のことで、80年代半ばにイギリスで発展した考え方でした。心理学の世界では長らく行動主義と呼ばれるアプローチが主流でした。人の心は直接読み取れないので、外に現れる行動を観察し、分析する方法です。そこでは、生体への刺激とそれに対する反応を関数関係で捉えることが重視され、心の中はブラックボックスのままでした。ところが、50年代後半、心の中を真正面から捉えようとする考え方が生まれました。コンピュータがデータを読み取るためのプログラムを必要とするように、人にも外部から情報を受けて判断や意思決定を行う「心のプログラム」があり、その構造の解明を目指そうとしたのです。

刺激と反応の関係を重視する行動主義から、心の働きをモデル化しようとする認知主義への転換でした。

「心の理論」は「心のプログラム」

を土台に生まれた考え方です。人は他人の心を推測しながら人間関係を保ちます。しかし、幼児期には相手の心を考えることが出来ません。母親に頼まれて買い物に行き、店員に「何が欲しいの」と聞かれて「お母さんに頼まれたもの」と答えてしまったりするのです。自分の知っていることと相手を知っていることの区別がつかない。つまり「心の理論」を獲得していないためにこのようなことが起こるのです。

では、子どもはいつ「心の理論」を獲得するのか。獲得には何が必要なのか。それを実証的に解明するのが私の研究です。

研究概要

自閉症の理解や 教育にも広がる 研究成果

帰国後、「心の理論」を研究テーマにした私は、さまざまな調査や実験を重ねました。その結果、「心の理論」は3〜9歳にかけて2段階に

発達することが分かってきました。

第1段階は4〜5歳。自分の知っていることと知らないことの区別がつくようになります。この時期、子どもが嘘をつき始めるのはそのためです。第2段階は9歳くらいです。AさんがBさんのことをどう思っているかが分かるというように、他者が別の誰かについて考えていることを推測できるようになります。子どもが親に対して秘密を持つようになるのはこの頃です。

自閉症の子どもの場合、10歳を過ぎても自他の区別が出来ない場合が多いことが研究により分かっています。自閉症の子どもは自分の関心に従って動くことが多く、落ち着きがなく自分勝手に見えてしまうことがあります。これは、自分が周りからどう見られているか分からないためで、悪気があるわけではありません。このような自閉症に対する理解は、近年、学校現場や社会に浸透しつつありますが、背景には「心の理論」の研究が貢献しているのです。発達研究は教育の在り方にもヒントをくれます。幼児が人を描く時、顔から直接、手足がある姿を描くこ

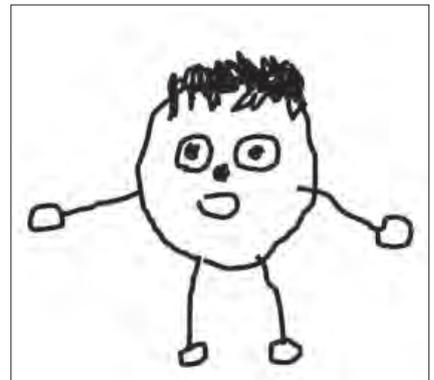


図 国や文化の違いにかかわらず、世界中の幼児が共通して描く「頭足人」と呼ばれる絵

とがあります(図)。これは胴体があることを知らないのではなく、子どもながらに胴体を「省略」しているのです。子どもは何でも必要なものから学習し、必要ではないものは省略する。逆に、必要な時期がくれば自然と理解できることが多い。ですから、早い時期から無理に知識を教え込む必要はなく、学習者が必要な時期に必要なことを理解できるように手助けすることが大切なのです。心理学は人がより良く生きるための実践的な学問です。そして、何よりも自分自身がポジティブに生きるためのヒントを提供してくれます。人の役に立ちたいという使命感と向上心を持つ人には、きっと魅力を感じてもらえると思います。

用語解説

1 精神医学

人間の精神活動にかかわる病理を対象とする医学の一分野。小説家の北杜夫は精神科医でもあり、『どくどくマンボウ航海記』『夜と霧の隅で』など、医師を主役とした小説を数多く手掛けた。

2 心の理論 (Theory of Mind)

人が他者の心の動きを推測したり、自分とは違う考え方を持つことを理解したりする心の機能のこと。1978年にアメリカの心理学者D・ブレマックとG・ウッドラフが提唱し、発達研究は80年代半ば以降にイギリスを中心に発展した。

3 行動主義

人間を外から観察し、外に現れる行動だけを研究対象にすべきであるとする心理学のアプローチ方法の一つ。1913年にアメリカの心理学者ワトソンによって提唱された。心理学の科学的側面を高める役割を果たしたといわれる。

4 認知主義

コンピュータ科学の発展に伴って生まれた考え方で、外からは観察できない心の仕組み(心のプログラム)の解明を目指す。1956年にアメリカのダートマス大で開催された人工知能のシンポジウムが出发点といわれる。

情動知能(EQ)と精神的な成長の関係を解明



野崎優樹さん
Nozaki Yuki

京都大大学院教育学研究科
教育認知心理学講座修士課程1年
(名古屋市立菊里高校卒業)

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 私は元々、文系と理系のどちらにも興味があり、高校時代は現代小説からサルトルの哲学書、アインシュタインの解説書まで、幅広く読んでいました。

将来について真剣に考え始めたのは、1年生の終わりにあった文理選択の時です。これからの社会を考えた時、科学技術の進歩はもちろん大切ですが、人間そのものが成長しなければ良い社会は実現しないのでは

ないかと考えました。そして、人間そのものにアプローチする学問、人類の進歩に携われる学問を探した末に行きついたのが心理学でした。

子安先生の研究室に進んだのは、「心の理論」の研究が、人間の情動知能(EQ)を高めることに役立つと考えたからです。

学部時代、人の成長には自分の心をコントロールする術を身に付けることが必要なのではないかと、私は考えました。そのために心理学が出来ることは何かを考え、「心の知能指数」といわれるEQに着目したのです。EQを高めることで人が精神的に成長し、社会全体の向上につながるのではないかと。それを追究したいという思いから、「心の理論」について深く学ぼうと決めました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 難しい仕事やストレスを克服すると、人々のEQは上がるのではないかと。このような仮説を立て、人が困難なことに對してどのように取り組めばEQが向上するかを、質問紙調査と実験を中心に調べています。

この研究の難しさは、個人差が大きいことです。実験や調査から得られた結果に對して、どこまでがその人の個性で、どこまでが普遍的なのかということを見極めなくてはなりません。実験や調査の結果を踏まえ、いかに普遍性のある理論を組み立てるか、理論に合わない部分をどのように説明していくのかが一番難しいところですね。

一方で、予想通りの結果が得られた時や、自分の仮説通りの結果が得られた時はうれしく、やりがいを感じます。そこは、文系でありながら理系の要素が強い心理学ならではの魅力の一つだと思います。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 一つのことにとこだわって、一生懸命考える習慣を付けるの良いと思います。そして、考えても分からなかったら積極的に行動する。他の人に話を聞いたり、本を読んだりする。それでも分からなければ、また考えて行動するということを繰り返すうちに、おのずと答えは見つかるはずですね。

たとえば、自分が望むような答えが得られなかったとしても、疑問を抱えながら考え、行動し続けるうちに見えてくるものはきつとあるはずですよ。大切なのは考えることを諦めて放棄したりせず、分からない気持ちを大切にしながら、前へ前へと進み続けていくことではないでしょうか。

私の高校時代

世界史の授業から人生の哲学を学ぶ

●高校時代に最も影響を受けた先生は、3年生の時に世界史を習った先生です。それまで、私にとって世界史は暗記科目でした。ところが、先生の授業を受けて、国同士のつながり、時代間のつながりが見えてきて、ダイナミックに歴史を捉えられるようになりました。過去の人々の努力、成功や失敗があって現在があることを、先生の言葉の端々から感じ、過去の人々が何を考えたのかを知ることが、未来を切り開く創造力につながることに気がきました。これは、今も研究活動の大切な土台となっています。

今思うと、先生は自分なりの「哲学」を持っていたのだと思います。直接聞いたことはありませんが、借り物ではない価値観を持っていた。私も先生のように自分自身の価値観を持って生きていきたい。それは、研究者として必要だけでなく、人生の困難を乗り越える上でも、大きな力になるはずです。